

発国家と環境国家の連鎖への注目は特筆に値する。著者が述べるとおり、どちらも「現場に何らかの不足を見出し、外からその不足を埋め合わせるための資源を持ち込むという開発国家のエートス」(p. 284)を保持するからである。かくして開発主義から生じた問題は、「持続可能な開発」のもとでさらなる開発主義へとつながる。筆者はここ数年ベトナムでPFES（森林環境サービスへの支払）の研究を行ってきたが、この点は全く同感である。

また、自然環境への働きかけという一見非政治的な国家のふるまいが、その非政治的装いゆえに非常に政治的な結果を生み出しているという「環境対策の隠れた政治性」を、多彩な理論と現場の情報を駆使して明らかにしている点も、本書の大きな魅力である。たとえば、水力社会や社会的財の概念を援用して、環境の統治が人の支配に転用される点を論じるくだりや、本書第2部で示される反転のさまざまなバリエーションの解釈は鮮やかで説得力がある。さらには、第3部でそれまでに検討した内容を実践的提言に的確に結び付けている点も、著者の真摯な姿勢を感じさせる。

一方で、読んでみて気になる点がないわけでもない。その第1は、著者が用いる「反転」には、環境の支配が人の支配に転じるという意味と、それが結局人と自然の関係の悪化を通じて持続可能性を脅かすという意味が含まれており、両者が明確には区別されていない点である。特に後者に関しては、中国の例から著者も認めるように、その妥当性は必ずしも自明ではない。「自然環境に接しなが

ら暮らしている人々が排除されるとなれば、彼らの国家に対する信頼は崩壊し、環境政策そのものが実効性を失ってしまう」(p. 292)のかもしれないが、両者がどうつながるのかをもう少し吟味する試みがあってもよかったのではないか。第2は、国家をやや単純化しすぎていないかという点である。国家は人が動かすとみるか、人は国家組織に回収されるとみるか。本書は主に後者の視点に立つので「ないものねだり」なのだが、いくつかの章を除いて国家を動かす人たちの「顔」がみえにくいと感じた。本書を読んで、国家とは何か？という素朴な疑問が浮かんだのは、そのせいだろう。

ともあれ、世の関心はパンデミック一色である。ある意味では、「危機」の少し前という本書の出版は時宜にあっていった。危機の時代の国家を考えるうえで、本書は有益な示唆を与えるからである。それは、多くの場合「危機」は外生変数ではなく、システム自体がつくりだす内生変数だということである。著者が今回のパンデミックをどうみるのかをぜひ聞いてみたいと思った。

小野林太郎・長津一史・印東道子編。
『海民の移動誌—西太平洋のネットワーク社会』昭和堂、2018年、400p.

中野真備*

本書は、国立民族学博物館の共同研究「アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

社会の人類史的研究—資源利用と物質文化の時空間比較」(研究代表者:小野林太郎, 2012~2015年度)の研究成果を基に刊行されたものである。表題に掲げられた西太平洋という広域を東アジア海域, 東南アジア海域, オセアニア海域の3つの空間軸に分け, また考古学的時間軸と民族誌的時間軸という2つの時間軸を設定し, ヒト・モノ・情報の移動を通して海域ネットワーク社会の構造や歴史を解明する。全体は3つの海域別に, 2つの時間軸による事例が対比的に配置される。

第I部では, 第1章で「海民の移動誌とその視座」が述べられ, 第2章で「海のエスノ・ネットワーク論と海民—異文化交流の担い手は誰か」を秋道智彌が論じる。民族集団は文化的・経済的・政治的に多様な「エスノ・ネットワーク」を形成してきたという。そのため資源や技術とその流通に関与する集団の差異と, 集団間の交易を可能にする言語の重要性を指摘する。第3章で「マダガスカル島と海域アジアを結ぶネットワーク」を飯田卓が論じる。交易航路を動くモノやヒトに着目すると, インフラ整備や政治経済的状況の変化が, ネットワークの転換点になったと指摘する。

両論文は, 3つの空間軸と2つの時間軸から海域ネットワークを捉える際に有用な枠組みや因子を提示したものである。

第II部では, 東南アジア海域のネットワークについて, 4つの論文とコラムが収められている。第4章の田中和彦・小野林太郎による「海域東南アジアの先史時代とネット

ワークの成立過程—『海民』の基層文化論」は, 先史時代ウォーレシア海域の集団に, 半農半漁的な「海民」性や, 海を介する流通ネットワークがあったとし, ここを海域アジアの基層文化のはじまりとみなすことが必要であるとする。

第5章の深山絵美梨による「耳飾が語る金属器時代東南アジアの海域ネットワーク」は, 金属器時代の耳飾工人の環境や知識, 技術の背景を検討した。それに基づく仮説として, 工人は南シナ海の海域ネットワークの媒介者たり得る回遊的職能民であり, ある種の海民であったと指摘する。

第6章の長津一史による「東南アジアにみる海民の移動とネットワーク—西セレベス海道に焦点を置いて」は, 海に住まうバジャウ人の越境移動を「海の資源のフロンティア」, 「商業の空間と特殊海産物」, 「近代国家の空間と越境」, 「暴力との相互作用」と特徴づけた。これらの特徴は, バジャウ人同士の人間関係, またはバジャウ人と他の民族や社会集団との人間関係というつながりによって生成されたと指摘する。

第7章の鈴木佑記による「〈踊り場〉のネットワーク—モーケンと仲買人の関係性に着目して」は, 船上生活時代のモーケン人は, 仲買人と強力で固定的なパトロン—クライアント関係にあったが, 1980年代以降は仲買人を吟味して選択するようになり, 緩やかな関係性を築いたとする。多種多様な人間を巻き込む「ネットワーク型社会」では, 仲買人を基軸とする移動性と多民族性が特徴であると指摘する。

この部をまとめると、東南アジア海域の「海民」の特徴は、考古学的時間軸では、価値のある資源を運ぶトレーダーや工人としての個人や集団であったのに対し、民族誌的時間軸においては商業志向が高く、特定の関係に依存しない個人であったことである。

第Ⅲ部では、東アジア海域のネットワークについて3つの論文とコラムが収められる。第8章の山極海嗣による「海を渡り、島を移動して生きた最初期の『海民的』人びと—宮古・八重山諸島の先史時代からみた海域ネットワーク」は、先史時代の海民がネットワークを拡大する志向をもたず、限られた空間で利用可能な資源を幅広く活用し、それが地域性へとつながったと指摘する。

第9章の島袋綾野による「中世・近世期における八重山諸島とその島嶼間ネットワーク」は、中・近世期にも、島嶼間の移動は限定的であったとし、表象される物質文化や精神文化が地域性を残し続けたと述べる。

第10章の玉城毅による「糸満漁民の移住とネットワークの動態」は、「門」と呼ばれる海岸の宅地群（埠頭）の形成に、兄弟の協力的な関係が重要であったとする。糸満の親族関係には、祖先や子孫といった観念的な関係に加え、生業や経済活動において協力し合う兄弟関係があり、両者が合わさる親族ネットワークが、漁民の移住を可能にしてきたと述べる。また、前者の関係性は東アジア的な要素であり、後者は東南アジア的な要素であると指摘する。

この部をまとめると、東アジア海域の「海民」の特徴は、考古学的時間でみればネット

ワークの拡大に消極的であった一方、民族誌的時間でみれば柔軟なネットワーク形成などの東南アジア的な要素を兼ね備えていたことである。

第Ⅳ部では、オセアニアの海域ネットワークについて3つの論文とコラムが収められる。第11章の小野による「先史オセアニアの海域ネットワーク—オセアニアに進出したラピタ人と海民論」は、アジア方面から移住してきた集団とニア・オセアニア（メラネシア）先住の集団との文化的混合に注目する。そしてラピタ人の「半農半漁」、「漁撈採集民」的な要素が、現代の東南アジア海域の海民に通じることを指摘する。

第12章の印東道子による「オセアニアの島嶼間ネットワークとその形成過程」は、島嶼間の相違はお互いに補完される関係にあったとしたうえで、経済的な互助関係や非常時の相互扶助がネットワークを維持させたとは指摘する。また、陸上を生活の基盤としつつも、島嶼間交易や島嶼部の資源を利用するなど、海域に進出していた点で広義の海民であると述べる。

第13章の深田淳太郎による「ムシロガイ交易からみる地域史—進行形のネットワーク記述に向けて」は、メラネシアの伝統的な貝貨のうち、ムシロガイ交易だけが継続したことに着目する。その背景には、採集地や採集者、運搬方法、交易経路、販売方法が複数あり、それらが常に変わり続けたことで、社会や環境の変化に対応できたことがあると指摘する。加えて偶発的な個人の行為や才覚の実践もあったと述べる。

この部をまとめると、オセアニア海域の「海民」は、考古学的な時間軸では、特定集団間の資源を交換したり、島嶼部の資源を利用したりして海域を利用した人びとであり、民族誌的な時間軸では、資源を得るための交易ルートを柔軟に変化させ、社会や環境の変化に対応してきた人びとである。

本書では、海域ネットワークのメインアクターとなる人びとを広義の「海民」とみなすことで、異なる時間軸・空間軸からの検討を可能にした。海民を「海に生計・生活の基盤を置き」、「多様な生業や資源利用」を特徴として暮らす人びとであるとしたことで、新たな分野横断的研究書となったのである。

ただし、本書では、「狭義の海民」や「広義の海民」という表現が多く用いられ、それぞれの時間軸・空間軸に登場するアクターが、どの程度「海民」的であるかという言及をしている。その結果、3つの海域それぞれの海民的要素の差異が明確になったが、「海民」の定義について総合的に定義することの難しさも示唆された。あるいは、一般化したイメージを追求することが、却って各地域に特異な海民的要素からの乖離につながるともいえる。特に、本書で扱う「海民」とは、その時代や地域に存在したはずの漁民とは必ずしも一致しないことにも留意する必要がある。含意性の高い定義から、さらに多様な「海民」像を求めたことに本書のジレンマがある。

また、考古学的痕跡からは「海民」的要素を見出すことが困難な場合もあるし、民族誌的成果は過去に遡るほど不確かなものに

なりがちである。たとえば、第5章において、耳飾工作の工人は「制作技術・知識を携え、海を渡り、仕事を終えて故地に戻る職能集団」であり、「南シナ海の海域ネットワークの媒介者たり得る回遊的職能民」であり、そして「文化的・経済的枠組のなかで海を渡る、ある種の海民」とされるものの、これが第1章で定義される海民に該当するというのは解釈が拡大されすぎている印象である。

また第3章が、9世紀頃にマダガスカル島に移住してきた人びとを、沈没船の発掘や政治経済状況の記録、比較言語学から推察したが、いずれも状況証拠にすぎない。第13章が指摘するように、「社会環境などの要素に還元できない、偶発的な個人の行為や才覚」があることも考慮しなければならない。このように考古学的時間軸と民族誌的時間軸に挟まれた、空白の時間をどのように扱うかも課題であろう。

以上に述べたような限界があった一方で、本書は海域ネットワークとその担い手である「海民」像を同質化しなかった点が優れていた。「海民」を扱うことのむずかしさを認めつつも、それぞれの研究分野の視点から捉え得る多様な「ネットワーク」を描出したことで、新たな海民研究・海域研究として優れていた。

また各章を空間軸でまとめたことにより、双方の時間軸が重なる事実関係についての新たな知見もみられた。そして本書が3つの空間軸を設けたことで、海域によるネットワークの違いが明らかになった。東南アジア海域の海民は、商業的志向に基づくためネッ

トワークは柔軟であり、多方向的に拡大した一方、オセアニア海域の海民は、特定集団同士の交換を目的とするため、移動航海は一定の地域内で循環し、完結した。また、東アジア海域においては、これら両方の要素を兼ね備えていた。

空間も時間も超えた海域ネットワークが広く論じられたことはこれまでの「海民」研究を再考させるものであり、今後も参照され続ける良著であろう。

鶴田 綾、『ジェノサイド再考—歴史のなかのルワンダ』名古屋大学出版会、2018年、vi+352 p.

近藤有希子*

歴史はいかに描けるだろうか。

本書は、多数派民族集団の「フトゥ」による少数派の「トゥチ」に対する大量殺戮として、これまで、ともすると安易な単純化のもとに描かれてきたルワンダのジェノサイドを取り上げて、その「標準的な説明」(p. 1)の刷新に向けて、果敢に取り組んだ労作である。

著者をして「停滞」(p. 5)した印象を抱かせるルワンダの歴史研究に対して、著者はいくつかの分析視角を携えて挑戦している。ひとつに、著名な歴史家の提言にもあるように、歴史のダイナミズムや当時のモメンタムを捉え損なわないようにすること。ひとつに、トゥチやフトゥ、ベルギー人といった集

団間関係の考究とともに、集団内の関係や対立にも目を向けること。ひとつに、国内・国際・ローカルという各層の政治レベルの交錯に敏感であること。

なかでも、著者は1950年代および1960年代という、アフリカ各国で独立が達成された重要な局面に焦点をあてる。ルワンダについては、「フトゥによるトゥチ王国の打倒」が達成された時期として一元的に説明されてきた期間である。植民地帝国から離脱したこの時代を核心として、著者は過去から現在に至る「紆余曲折」、つまり「暴力回避や『和解』への提案、暴力的でない未来の可能性」(p. 22)を追求してきた。

そのときの手法は、各国に散逸してきた史資料の分析を中心としている。度重なる紛争によって被害を被ったルワンダの公文書館の脆弱さゆえに、旧宗主国であるベルギーにはじまり、米国、英国、イタリアと、文字どおり世界中の公文書館や図書館を飛び回って、現在に至る「ルワンダ」、および本書の関心となる「ジェノサイド」を構成する断片を収集している。

以下、全体の構成を概観する。

第I部では、1950年代前半までのルワンダが対象にされる。まず第1章で、植民地化以前の19世紀～20世紀中盤、エスニシティが国家形成の過程のなかで漸進的に形成されてきたこと、それが植民地支配のもとで明確化・固定化されたことが確認された。さらに、トゥチとフトゥの関係や国家権力の影響には地方ごとの差異があり、トゥチのリー

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科